



TITLE:

師を憶う

AUTHOR(S):

出口, 勇蔵

CITATION:

出口, 勇蔵. 師を憶う. 経済論叢 1976, 118(3-4): 260-264

ISSUE DATE:

1976-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/133665>

RIGHT:

經濟論叢

第 118 卷 第 3・4 号

哀 辞

故石川興二名誉教授遺影および略歴

国家独占資本主義論争における国家と社会……………	池 上 惇	1
合衆国の大規模農場経営の位置と その階級的性格(3)……………	中 野 一 新	18
「プロシア型」農業進化の構造・序論……………	加 藤 房 雄	48
利潤の内部留保, 新株発行を含む マクロ分配理論……………	加 納 正 雄	70
アダム・スミスの国家論……………	中 谷 武 雄	83
差額地代論における資本主義的土地所有の形成……………	梅 垣 邦 胤	106
追 憶 文		
師 を 憶 う……………	出 口 勇 蔵	124

故石川興二 名誉教授 著作目録

昭和 51 年 9・10 月

京 都 大 学 經 済 学 會

追 憶 文

師 を 憶 う

出 口 勇 蔵

石川興二先生は、昭和43年5月12日の朝、御自宅で脳結栓で倒れられ、その日から京大病院に入院されて治療を受けておられたが、約8ケ年の御闘病のすえに、奥様の見事な御看護の甲斐もなく、本年3月25日の夕刻に死去された。あと3ヶ月で満84歳を迎えられるはずであった。

先生が学界と教育界とに活躍された50年以上の期間は、敗戦によって2つの時期にはっきりと分かれており、その前後を通して生きた人を評価するための規準には、細かくいうと、定まったものがあるとは必ずしもいえないから、その人たちを正しく認識することは今もってむづかしい。敗戦ののちに戦争責任を問われて社会活動に制約を受けた人のばあいには、そのむづかしさはさらに大きくならざるをえない。そして石川先生のはあいもそうである。

ここに門弟の一人として師を憶う筆をとろうとすると、師への認識が公正であれという願いが、手先きにまでこめられてくる思いがするのである。

I 輪 読 会

私は中学時代に蜷川虎三先生から経済学の手ほどきを受けた。蜷川先生が訳されたデーヴィスの『経済統計綱要』などを讀んだせいもあって、外国留学から帰られた蜷川助教授の最初のセミナーに参加して、フラスケンバーの *Der Sinn der Indexzahlen* を読む機会を与えられたが、かたわら、石川先生が有志の学生を指導された輪読会に出席することをゆるされた。(その輪読会の揭示が出た、木造の小さい学生控所がなつかしく思い出される。粗末ではあったが、研究生活への門戸として、そこには純潔さがあふれていた。)

その会のテキストはディルタイの後期の歴史認識論の論文、つまり全集第7巻に収まっている、*Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften* であ

って、私が参加した時にはすでにその半分まで読み進められており、その論文が終ると、ディルタイが「歴史的理性批判」と名づけようとした草稿が取り上げられた。

参加者は和田三良氏（故人）、竹中靖一氏、相沢秀一氏、前田長宗氏などであった。正直にいうと、テキストの中味は、歴史ことに精神史の実際について自分で苦労した者でなければ、ほとんど理解できない。ディルタイの筆は気負いがなく淡々としてもいるので、表面の意味をつかみ取るのは苦勞しないが、その真意は、青二才の私には判るはずもなかった。しかし石川先生の御指導でやがて手に入れたディルタイ著作集の第1巻と第5巻とを曲がりながらも読みつづけることによって、「生の哲学」の立場がわかりはじめて来た。ことにそれまで、日本の哲学界を風靡していた、そして私が高校時代から教室でも自宅でも学ぶことの多かった、新カント学派の考えとの著しい相違から、19世紀後半期からのドイツの哲学や人文・社会科学の動向について、ある程度には、理解することができるようになった。また一方では、「唯物論研究」が出ていたし、三木清が「生の哲学と弁証法」などという論文を発表したりしていたから、ディルタイの思想とマルクシズムの立場との距離を思ってみることもできた。また、年に一度は京大で講義された西田幾多郎がつぎつぎにと発表した論文を読むと、西田哲学と以上の諸思想との異同を考えなくてはならなかった。

こんな風に、私はディルタイの輪読会に出席したおかげで、外国の思想にちかに触れることができたと同時に、当時の思潮のいくつかを知って、それらを相対的に考えてみることを学んだのであった。

II ゼミナール

昭和6年から昭和17年までの12年のあいだ、私は石川先生のゼミナールに関係していた。最初はもちろんゼミ学生として、それ以後は大学院学生・副手・助手・講師として、先生を助けて、学生との間に立って世話をしつづけたわけである。毎土曜日の午後1時から5時まで、15人から20人の学生は楽友会館の2階の一室に閉じこもって、先生をかこんで研究発表と討論の時間をもった。テーマは全体を通じて、日本および外国の社会思想史に関係したものであった。

石川先生は東西の文化史の比較研究に格別に深い関心をおもちであって、ゼミナールからは、御意見をたしかめ深めるに足る素材を見つけることを望まれたようであった。

殆ど毎時間のように、先生の共同体論と日本の社会や文化論が出てゼミは終るのであった。

ゼミナールは毎年一度か二度、一日の遠足をした。京都の近郊で出かけねところはなかったが、中でも印象のふかかったのは昭和10年ごろの大和旅行であって、法隆寺・薬師寺・唐招提寺を訪れた時のことである。先生は羽田亨教授の、法隆寺の佐伯管長あての紹介状を持参されたのであったが、その効果は果たして観面に現れた。寺務所から出てこられた先生には案内の僧が1人ついていて、彼は夢殿で大きな南京錠のついた扉をあけてくれ、われわれが普通にはみられぬ救世観音を長いあいだ觀賞するがままにしてくれた。秘仏が見られたという喜びは大きく、私はこういう便宜をもつ人と同行した幸せをかみしめていた。

III 戦時の先生

京大の人文科学研究所の設置は石川先生の尽力とはなしては考えられないであろう。東西文化の比較研究に深い関心を寄せられた先生は、戦争がはじまってからは特に、日本や東洋の社会や文化の個性を明かにすることが、人文科学——このばあい、社会科学もふくむものと考えられている——には必要であると、強く主張されたが、登学される日には必ず出られた教官食堂での熱弁が他学部の教官や総長を動かしたのだらう（これは私の想像である）、既設の東方文化研究所とは別個に、東亜に関する人文科学の総合研究をおこなう研究所の創設の議が熟して、京大の新規事業の中に繰り入れられたのである。

同時に、先生は同様の趣旨から経済学部の講座増設の必要を説かれ、率先して当時の講座を倍増する計画を立てられ、先生の部長時代にその2つが新設されたのであった。

これらの事業を実現するために、先生は全く異常な仕方に関係官庁と接衝されたと言っている。（経済学部編集の『創立50年記念・思いで草』を参照せられたい。）

IV 先生の学問

晩年の石川先生は書斎の違い棚のあるところの長押の上に、アルフレッド・マーシャルと西田幾多郎と河上肇の写真を、ならべて掲げておられた。この3人は先生がみずから師と仰いだ人たちである。

先生の経済学の研究は戸田海市から勧められた、J・S・ミルにはじまり、マーシャ

ルへとつづき（河上との論争において先生はマーシャルをもち出した）、外国留学でイギリスに滞在中、先生はマーシャルを一度ならず訪ねて教えを請われた。その内容は先生のマーシャル訪問記に詳しい。思うに、マーシャルが先生を引きつけたのは、マーシャルがただの経済学者ではなく、ドイツ理想主義哲学について造詣の深かったことにもよるであろう。西田幾多郎とは京大入学以来の交渉があり、文字どおり畏敬的であって、西田哲学を経済学の指導理念にせよと説かれたこといくたびであったことか、それは文字どおり教え切れなかった。親しく西田さんを田中の私邸に訪ねられたことも多く、終りには、西田さんも少し当惑されたと聞いているが、ことほど左様に先生は西田哲学を崇敬された。（西田さんの石川先生への思いやりについては、西田さんの手紙、全集の中で1792番とあるものを見られよ。）

河上肇との師弟関係は特別のものであった。——尊敬と反撥。交渉は京大入学時にはじまり、河上の考えには哲学的基礎がないといって、先生は激しく批判を加え、学内で逢っても挨拶もせぬような状態のこともあったというが、外国留学から帰国する先生を迎えて、河上は、経済学に哲学的基礎が要ること「君のいう通りだよ」と述懐して、先生をよこばせた。しかし河上のいう哲学的基礎は、先生の望むものではなかったのである。先生は西田と河上との媒介のために力をつくし、「経済学批判会」という名の研究会に西田を招いて両者の討論の場とされたこともあり、三木清や木村素衛もそれに参加してヘーゲルの論理学を研究する機会をもたれたこともあった。三木清の思想の展開のためになにがしかの寄与となったのかも知れない。

河上さんを偲び、彼の精神を顕揚するために、先生は河上肇会というのを創られたが、それは東京の河上会とはちがう団体である。この会は河上の法要をいとなみ、建墓建碑の事業を行なった。先生は毎年の例会にはいつも先頭に立って会の準備をされ、法然院に墓碑をつくる時には、まずその趣旨を説いて関係者の賛成を得、石と碑文の選定にも主に努力された。私も先生に請われて、石えらびに同行したことがあったから、御尽力のほどがよく判るのである。墓碑が作られる場所は、河上さんの詩から決められたのだが、法然院の住職とは懸念の間柄であったので、交渉はきわめて円滑にはこんだのであった。また墓碑のとなりが未知の人の墓になってはとの配慮から、墓碑の東側の地を石川先生自身の墓のために確保されたことは先生らしいことであった。

このように、石川先生が尊敬されたのは上の3学者であったけれども、先生の学問は

先生の強烈な個性によって貫かれているのであって、3人の学風とはおよそ違った特色をもっていた。先生は西田哲学的に考えることを主張されたけれども、先生自身の思索はそれとは異なっていた。私はこのことを無遠慮にいうものだから、先生の不興を買うことが多かったけれども、事実は事実として認識せねばなるまい。そして先生は西田哲学にたいしては直ぐに護教的な態度に出られるので、客観的な話し合いをもつことは困難であった。先生には、西田哲学を語ると、自分が西田さんになったように思われるのではあるまいかとさえ、思われた。そして他人の見解を客観的に理解しようとする態度がすくなかったことは残念なことだった。それが先生自身の思想を正しく理解させない結果にもなったと、私は思っている。

V 先生の生活と長患

先生は共同体的思想のもち主であったから、家庭を非常に大切にされた。時にはワン・マンの振舞もあったろうと想像されるが、御家族にたいする愛情はそれをカバーするに足りたであろう。生活は質素、生涯、住居のために土地を求められず（ただし墓地は別）、土地国有論者の面目を全うされた。

先生は健康であった。少年時代からの冷水摩擦で風邪をひかれたことも殆どなく、和服に袴に草履の、国士と見まがう出で立ちに常に若々しかった。健康には細かい注意が行き届き、たとえば御宅と研究室とを結ぶ道すがら、吉田山の山道で大きく深呼吸されるのを幾度も見たことがあった。癌性疾患にたいしては気を配られたが、血管の病気に加ろうとは全く考えておられなかった。

京都女子大学の人事の件で先生には納得できぬことが起ったために、激昂されたことがあったという。それから間なしの御発病であった。歯の治療を受けながらも読書をやめなかったという程の方が書物から離れた境遇に陥るというのは、何ともお気の毒なことだった。私は京大に在職中は、ほとんど定期的に先生を見舞っていたけれども、先生にむかって目礼をし、先生が私に注目なさるのを見とどけるだけで満足しなくてはならず、あとは行き届いた看護をなさる奥様とお話しをするのであった。死亡なさるまで御病床にあること、93か月であった。

本年3月27日、黒谷山内、常光院で告別式執行。戒名は浄土院興譽経国居士である。ついで、法然院の墓地、河上肇の墓の東側に建てられた墓に納骨された。時に8月16日。